

Muṇḍakopaniṣad における aparā vidyā について

田 中 純 也

1. はじめに

Muṇḍakopaniṣad は、韻文の古 Upaniṣad の 1 つである。このテキストの冒頭で、家長 Śaunaka は「何が知られたときに、この全てが知られるようになるのか」(MuU.1.1.3) と聖仙 Aṅgiras に質問する。それに対して、Aṅgiras は「parā vidyā と aparā vidyā, 2 種類の知識が知られるべきである」(MuU.1.1.4) と答える。ここでの parā vidyā は、代々語り継がれてきた brahmanvidyā と同義であり (MuU.1.1.1-2), 「それによって不滅のものが獲得されるところのもの」(MuU.1.1.5) と説明される。一方, aparā vidyā は, 4Veda と 6Vedāṅga に関する知識である (MuU.1.1.5)。

Śaṅkara (8 世紀頃) に帰せられる Muṇḍakopaniṣadbhāṣya (以下 bhāṣya) は知行併合論を否定する立場¹⁾に基づいて、祭式に関する aparā vidyā を否定的に理解している。また、先行研究によっても同様の解釈がなされ、Muṇḍakopaniṣad における祭式軽視の姿勢が指摘されている²⁾。

しかし、Muṇḍakopaniṣad は「学者たちの入門³⁾」を杵物語とするテキストの 1 つでもある。その中で、Śaunaka は薪を手にして Aṅgiras に近づき (MuU.1.2.12), vrata (誓戒) を遵守して秘義を教わっている (MuU.3.2.10-11)。そのため、祭式に携わる者たちによって aparā vidyā が否定的に解釈されているという点には未だ検討の余地があると考える。

本稿では、まず aparā vidyā についての bhāṣya の理解と先行研究の解釈を整理する。その上で、祭式軽視の姿勢が MuU.1.2.7 を根拠として指摘されている点を確認する。次に、MuU.1.2.7 に見られる avara に、中立的／

肯定的な解釈が可能であることを示し, aparā vidyā も同様に理解され得ることを指摘する。そして、「学者たちの入門」としての諸要素を踏まえ, Muṇḍakopaniṣad における祭式や aparā vidyā の位置付けを検討する。

2. bhāṣya と先行研究

bhāṣya は、導入で「知識と行為は対立する」と表明している。そして、そのような立場を一貫して、「brahmavidyā のみが解脱への手段であり、行為がそれにはなり得ない」(bhāṣya. 導入; 1.2.12; 2.2.6; 3.1.4) と理解している。

ここでの対立する知識と行為とは、brahmavidyā と aparā のことである (bhāṣya.1.1.4-5)。前者は parā vidyā, 後者は主に agnihotra を指しており (bhāṣya.1.2.2), それぞれ解脱と輪廻を対象としている (bhāṣya.1 の解説部分)。さらに、解脱のためには「aparā vidyā は否定されるべき (nirākartavya)」(bhāṣya.1.1.4) であり、「aparā vidyā の対象である輪廻は捨て去られるべき (hātavya)」(bhāṣya.1 の解説部分) であるとも述べられている。つまり、「解脱のためには、agnihotra などの行為に関する知識 (aparā vidyā) は必要なく、parā vidyā のみを追求するべきである」ということである。

先行研究も Muṇḍakopaniṣad に説かれる 2 種類の知識について同様の解釈をしている。Olivelle (1998:629-630) は MuU.1.1.8 と MuU.1.2.7 の訳註の中で、“Through heat . . . : here begins, I think, an argument (extending up to verse 2.6) for the efficacy and superiority of ritual activity. This opinion is rejected by the author at MU 1.2.7.”, “here begins the author’s reply to the ritualist’s arguments, which began at MuU 1.1.8.” と述べている⁴⁾。言い換えると、「Aṅgiras は、先に祭式主義者の主張 (MuU.1.1.8-1.2.6) を説いてから、それを否定する形で著者の主張 (MuU.1.2.7 以降) を代弁している」ということになる⁵⁾。

このように、祭式の効力や優位性を讃える記述に続く MuU.1.2.7 を主な根拠として、同テキストにおける祭式軽視の姿勢を指摘しているのである⁶⁾。

3. *Muṇḍakopaniṣad.1.2.7* の解釈

Muṇḍakopaniṣad.1.2.7

plavā hy ete adṛḍhā yajñarūpā aṣṭādaśoktam avaram̐ yeṣu karma /
 etac chreyo ye 'bhinandanti mūḍhā jarāmṛtyuṃ te punar evāpiyanti ⁷⁾ //
 実に、祭式の形態であるこれら 18 のものは、漂っていて、定まってい
 ない。そこでは、行為は *avara* であると言われる。これを最良のもの
 として讃える愚者たち、彼らは、まさに再び、老いと死へ赴く。

MuU.1.2.7 における「行為」は祭式行為と同義であり、それに関する知識
 が *aparā vidyā* である。また、多くの先行研究がこの *avara* を “inferior” と
 訳している⁸⁾。そのため、この「行為は *avara* である」という記述が、祭式
 軽視の姿勢を指摘する上での根拠になっていると考えられる。

この *avara* が「劣ったもの」として否定的に理解されているために、行為
 に関する *aparā vidyā* が「否定されるべき知識」と見なされている。そして、
 「前主張 (*aparā vidyā*) を否定して自身の主張 (*parā vidyā*) を説くために、
 「2 種類の知識が知られるべきである」と語られる」(*bhāṣya.1.1.4*) と理解
 されているのである。この場合、MuU.1.2.7 以降の文脈においては「祭式そ
 のものの否定」が意図されていることになる⁹⁾。

一方、後藤 (2017:60) が MuU.1.1.2¹⁰⁾ の *parāvarām* を「高次・身近の [知
 識]」と訳しているように、MuU.1.2.7 の *avara* を「身近なもの」などと中
 立的／肯定的に解釈することも可能であると考えられる。その理由の 1 つとして、
avara が単純に「行為」と対応する形で説かれている点が挙げられる。

MuU.2.2.8 には¹¹⁾、MuU.1.1.2 と同様に *para* と *avara* の複合語が見られ
 る。また、そこで説かれている内容は、「結び目」に関して MuU.2.1.10¹²⁾
 とパラレルの関係にある。両者を比較すると、MuU.2.2.8 における「*para*
 と *avara*」の関係は、MuU.2.1.10 における「*Puruṣa* と行為など」の関係を
 意図したものであることが推測される。さらに、その「*Puruṣa* と行為な
 ど」の関係は、MuU.2.1.1-10 (*Puruṣa* からの創造説) に説かれているよう
 な、創造の「原因と結果」の関係で表される¹³⁾。したがって、少なくとも

MuU.2の文脈における「行為など」に、「劣ったもの」などという否定的な意味は含まれていないのである。

そのように、avaraと行為などが同一のものとして説かれているならば、上に挙げた「行為はavaraである」という記述は、単に「行為はparaではなく、avaraとして位置付けられる」という意味に過ぎないということになる。

4. 「2種類の知識が知られるべきである」

avaraが中立的／肯定的に解釈されるならば、「avaraは劣ったものである」という理解に基づくaparā vidyāの位置付けを再考する必要がある。そこで、Aṅgirasの「2種類の知識が知られるべきである」という言葉に注目する。

Muṇḍakopaniṣadでは、実際に2種類の知識が説かれている。その中で、不滅のものを説く箇所(MuU.2.1.1¹⁴⁾、MuU.2.2.2¹⁵⁾)と全体を総括する箇所(MuU.3.2.11¹⁶⁾)に加えて、祭式を讃える箇所(MuU.1.2.1¹⁷⁾)にもtad etad satyam、つまり「そういうこれが真実である」という語句が見られる。

間口(2005)は、MuU.1.2.1とMuU.2.1.1のtad etad satyamは祭式主義者と知者を対比させるための語句であり、Aṅgirasの語った内容がMuU.3.2.11のtad etad satyamによって要約されていると論じている。

しかし、MuU.1.2.1と対比関係にあるはずのMuU.2.1.1では火を比喻に用いて、「火から火花が散るように、そのように不滅のものから存在が生じ、同じ場所へ帰入する」と説かれている¹⁸⁾。そのため、MuU.1.2.1を踏まえる形で、不滅のものが説明されているとも理解できる。

さらに、MuU.1.1.1¹⁹⁾において、brahmavidyāは「一切の知識の拠り所」とされている。その点からも、aparā vidyāは「否定されるべきもの」ではなく、brahmavidyāに依拠したもの、あるいはその範疇にあるものとして説かれていることが推測される。

以上のことから、「最終的にBrahmanに到達し得る知識はparā vidyāであるが、Aṅgirasが語った内容はMuU.1.2.1ff (aparā vidyā)とMuU.2.1.1ff (parā vidyā)の2種類の知識であり、前者を中立的／肯定的に踏まえて後

者が獲得されるべきである」と解釈することができる²⁰⁾。その場合, aparā vidyā は「否定されるべきもの」ではなく, 必要な知識として理解されよう。

5. 「学者たちの入門」との関係

Muṇḍakopaniṣad には, 薪の持参²¹⁾ (MuU.1.2.12) や brahmacarya の要求 (MuU.3.1.5), vrata の遵守 (MuU.3.2.10-11) といった「学者たちの入門」の要素が見られる。

Muṇḍakopaniṣad.1.2.12

parīkṣya lokān karmacitān brāhmaṇo nirvedam āyān nāsty akṛtaḥ
kṛtena /

tad vijñānārthaṃ sa gurum evābhigacchet samitpāṇiḥ śrotriyam
brahmaniṣṭham //

行為の集合である諸世界を検討して, バラモンは「作られていないものは存在しない」と, 無関心を為している. 彼は薪を手にして, その認識のために, 他ならぬ Veda に精通し Brahman に専心している師に近づくべきである。

「学者たちの入門」は薪の持参などを伴って行われる²²⁾。この行為は学生として教えを乞う際の意思表示として理解されている²³⁾。この語が直接 agnihotra の挙行を示す確証はないが, 祭火の世話との関係は否定できないと思われる。

Muṇḍakopaniṣad.3.1.5

satyena labhyas tapasā hy eṣa ātmā samyagjñānena brahmacaryeṇa
nityam /

antaḥśarīre jyotirmayo hi śubhro yaṃ paśyanti yatayaḥ kṣīṇadoṣāḥ //

実に, 日々の, 真実によって, 苦行によって, 正しい知識によって,

brahmacarya によって、この Ātman が獲得されるべきである。実に、罪を欠く苦行者たちが見るそれは、身体の中において、輝く、光から成るものである。

また、入門の文脈では止住や brahmacarya が要求される場合もある²⁴⁾。通常、brahmacarya は師のもとでの奉仕や一定期間の止住を示すものとして理解されている²⁵⁾。

Muṇḍakopaniṣad.3.2.10

tad etad ṛcābhyuktam

kriyāvantaḥ śrotriyā brahmaniṣṭhāḥ svayaṃ juhvata ekarṣiṃ
śraddhayantaḥ /

teṣāṃ evaitāṃ brahmavidyāṃ vadeta śirovrataṃ vidhivad yais tu
cīrṇam //

そういうこれは、讃歌によって、次のように言われている。行為（祭式）を行う者たち、Veda に精通した者たち、Brahman に専心する者たち、信仰を有する者たちは、自ら ekarṣi に献じる。他ならぬ彼らに、この brahmavidyā を語るべきである。śirovrata (頭の誓戒) が規則通りに為されたならば。

Muṇḍakopaniṣad.3.2.11

tad etat satyam ṛṣir aṅgirāḥ purovāca naitad acīrṇavratō 'dhīte /

namaḥ paramarṣibhyo namaḥ paramarṣibhyaḥ //

そういうこの真実を、以前、聖仙 Aṅgiras は語った。vrata を遵守しない者はこのことを理解／学習しない。最高なる聖仙たちに敬礼。最高なる聖仙たちに敬礼。

六

brahmacarya と同様に、vrata も期間／長さを有するものとして理解されている²⁶⁾。したがって、ここでは、弟子は brahmavidyā を獲得するために、何らかの vedavrata を一定期間遵守する必要があったと推測される。

これらの記述から、他の「学者たちの入門」をテーマとするテキストと同様に、師のもとでの一定期間の止住が示唆されていると言えよう。ここで注目すべきは、どのような者が薪を持参し、止住や brahmacarya を行い、vrata を遵守するのかということである。

MuU.3.2.10 では、「行為（祭式）を行う者 (kriyāvat)」など²⁷⁾ が vrata を遵守した場合に限り、brahmavidyā を語るべきであると説かれている。同時に、vrata を遵守する者が「[祭火に] 献じる (juhvate²⁸⁾」ことも示されている。そのため、祭式を行う者が弟子として想定されていると考えられる。

以上のことを踏まえると、弟子は師のもとでの止住の際に、agnihotra などの祭式、あるいは祭火の世話などを日々行い、vrata を成就した時点で brahmavidyā を教わるということになる。

このことは、「MuU.1.2.1 (aparā vidyā) を中立的／肯定的に踏まえて MuU.2.1.1 (parā vidyā) を獲得する」という先述の解釈と合致する。したがって、形式の上からも、必ずしも祭式が軽視されていたとは言えないと考える。

6. 終わりに

「Muṇḍakopaniṣad は祭式軽視の姿勢を有する」という主張は、祭式を讚える記述 (MuU.1.1.8-1.2.6) が MuU.1.2.7 によって否定されているという解釈に依拠するものである。しかし、その根拠となる avara は否定的ではなく、中立的／肯定的に理解され得る。

そして、avara が「劣ったもの」であるという先入観を排しつつ、入門の文脈を考慮すると、日々の祭式に関わる aparā vidyā は否定されるべきものではなく、必要な知識として理解されることになる²⁹⁾。その場合、MuU.1.2.7 以降の文脈においては、「祭式そのものの否定」ではなく「祭式を最良のものとして崇める者の否定」が意図されていることになる³⁰⁾。

祭式そのものが否定されていないならば、MuU.1.2.8-9 と類似する箇所 (KU.2.5, PU.1.9) や、vidyā と avidyā が併記されている箇所 (ĪU.9-11, KU.2.4, BĀU.4.4.10) を中心に、従来と異なる解釈が可能になると考える。

そのため、今後の課題として、それらの記述における祭式の位置付けを再検討する必要がある。

略号表

AVŚ: *Atharvaveda* (Śaunaka) , BĀU: *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* (Kāṇva) ,
ChU: *Chāndogyopaniṣad*, ĪU: *Īsopaniṣad*, KU: *Kaṭhopeniṣad*, KauU:
Kauṣītakyupaniṣad, MuU: *Muṇḍakopaniṣad*, PU: *Praśnopaniṣad*, ŚB:
Śatapathabrāhmaṇa (Mādhyandina) , ŚU: *Śvetāśvataropaniṣad*

参考文献

一次文献

Āpaṭe, Hari. Nārāyaṇa. 1918. *Muṇḍakopaniṣat: Ānandagirikṛtaṭīkāsamvalitasāṅkarabhāṣyasametā: tathā Nārāyaṇaviracitā Muṇḍakopaniṣaddīpikā ca. Ānandāśramasamskṛta Granthāvaliḥ* 9.

Hertel, Johannes. 1924. *Muṇḍaka-Upaniṣad, kritische Ausgabe mit Rodarneudruck der Erstaussgabe (Text und Kommentare) und Einleitung. Indo-Iranische Quellen und Forschungen* 3. Leipzig: Haessel Verlag.

Limaye, V. P. & Vedekar, R. N. 1958. *Eighteen Principal Upaniṣads*. Vol. I. Poona: Vaidika Saṁsodhana Maṇḍala.

Raghunath, Hari. 1991. *Īśādinavopaniṣadaḥ with Śāṅkarabhāṣya*. Vrajjivan Prachyabharati Granthamala 68. Varanasi: Chaukhambha Surbharati Prakashan.

Sadanand, V. 1999. *Commentaries on the Upanishads*. Complete Works of Sri Sankaracharya in the original Sanskrit 8. Chennai: Samata Books.

Subrahmaṇyaśāstrī, S. 1979. *Shrī Shaṅkarabhagavatpādācāryaviracitam Upaniṣadbhāṣyam*. Volume-I. Varanasi: Maheśa Anusandhāna Saṁsthānam.

二次文献

- Bloomfield, Maurice. 1964. *Hymns of The Atharva-Veda*, Delhi, Patna, Varanasi: Motilal Banarsidass.
- Gambhīrānanda, Swāmī. 1958. *Eight Upaniṣads*. Vol. 2. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Gupta, Som. Raj. 1995. *The Word Speaks to the Fausian Man*. Vol. 2. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Jayantkrishna, H. Dave. 1988. *Thirteen Principal Upaniṣads*. Vol. I. Praśna and Muṇḍaka Upaniṣads. Bombay: Bharatiya Vidya Bhavan.
- Jones, Richard. H. 1981. "Vidyā and avidyā in the Īśa Upaniṣad." *Philosophy East and West* 31 (1) : 79–87.
- Kajihara, Mieko. 1995. "The brahmacārīn in the Atharvaveda." *Journal of Indian Buddhist Studies* 43 (2) : (1) – (6) .
- 2016. "The Upanayana and the 'Repeated Upanayana (s) '." *Vedic Investigations*. 271–296.
- Killingley, Dermot. 2017. "The Upaniṣads and the emergence of Theism." *The Upaniṣads A Complete Guide*. London and New York: 161–173.
- Olivelle, Patrick. 1998. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*. New York: Oxford University Press.
- 2010. "Upaniṣads and Āraṇyakas." *Brill's Encyclopedia of Hinduism*. Volume II. edited by Knut A. Jacobsen. 41–55.
- Sastri, S. Sitarama. 1905. *Isa, Kena, Mundaka Upanihads and Sri Sankara's commentary*. Vol. I. Madras: V. C. Seshacharri.
- Schmidt, Hanns-Peter. 1958. *Vedisch vratā und awestisch urvāta*. Hamburg: Cram, de Gruyter & Co.
- Tull, Herman. W. 1989. *The Vedic Origins of Karma: Cosmos as Man in Ancient Indian Myth and Ritual*. Delhi: Sri Satburu Publications.
- 天野恭子 (旧姓 坂本) 2002 「マイトラーヤニー・サンヒターにおける指示代名詞の使用法」『インド思想史研究』14: 25–43.
- 梶原三恵子 2003 「ヴェーダ入門儀礼の二つの相——通過儀礼と学習儀礼——

- 」『仏教学セミナー』78: 86-67.
- 2005「ヴェーダ学習と誓戒」『小林圓照博士古稀記念論集 佛教の思想と文化の諸相』161-175.
- 2016「ウパニシャッドと初期仏典の一接点——入門・受戒の儀礼とブラフマチャリヤ——」『人文学報』109: 33-102.
- 後藤敏文 2017「Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について」『国際仏教学大学院大学研究紀要』21: 45-90.
- 阪本（後藤）純子 1994「髪と鬚」『日本仏教学会年報』59: 77-90.
- 2014「出家と髪・鬚の除去——ジャイナ教と仏教との対比——」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』334-349.
- 澤井義次 2016『シャンカラ派の思想と研究』慶應義塾大学出版会.
- 田中純也 2019「Muṇḍakopaniṣadbhāṣya について——para と avara の扱い方——」『豊山教学大会紀要』47: (218) - (207) .
- 辻直四郎 1990『ウパニシャッド』講談社.
- 前田専學 1980『ヴェーダーンタの哲学：シャンカラを中心として』平楽寺書店.
- 間口美代子 2005「Muṇḍakopaniṣad における satya について」『印度學佛教學研究』53 (2) : (76) - (78) .

註

- 1) 「解脱のためには知識も行為も共に必要である」(前田 1980:258) という立場。Śaṅkara の立場については澤井 (2016:221) 参照.
- 2) “More than any other Upaniṣad, the MuU engages in a direct and frontal attack against both vedic ritualism and the vedic texts that embody the ritual tradition.” (Olivelle 1998:434) という主張が例として挙げられる.
- 3) Brāhmaṇa や Upaniṣad には, Veda の学習を終えた家長が新たな教えを学習するために再び師に入門する場面がいくつか描かれており, 梶原がそれを「学者たちの入門」と定義している (梶原 2003; 2016).
- 4) Killingley (2017:164) も “... But whereas the early prose Upaniṣads,

especially the *Bṛhadāraṇyaka* with its opening praise of the sacrificial horse, and the *Chāndogya* with its references to Sāmavedic chant, are clearly connected with the ritual traditions to which they are affiliated, the middle-period Upaniṣads are less so, and generally show less interest in ritual. They do not prescribe rituals, except very briefly. … The passage in praise of ritual in the *Muṇḍaka Upaniṣad* (MU 1.2.1–6) is followed by one disparaging ritual (MU 1.7–12) ; this may represent an argument in which the former view is rejected (Olivelle 1996: 396, note on MU 1.1.8) . These passages may be dialogues, but they do not identify the speakers as the early prose Upaniṣads do.” と述べており、同様の解釈を示している。

- 5) 同様に, Olivelle (1998:629) は “The text itself does not contain any indication that it is really a dialogue.” と述べている。
- 6) Olivelle (2010:52–53) 参照。
- 7) api √i を採用した。
- 8) 「最良のもの (śreyas)」との対比を意識した結果, このように訳しているとも考えられる。Sastri (1905:114), Gambhīrānanda (1958:103), Jayantkrishna (1988:143), Gupta (1995:43), Olivelle (1998:441) 参照。ちなみに, これらの先行研究は MuU.1.1.2 の avara を apara と区別せずに, あるいは *bhāṣya* の理解と同様に訳している。MuU.2.2.8 の avara の訳も, Jayantkrishna (1988:171) の “lower Brahma” 以外は apara と区別されていない。
- 9) *bhāṣya* は 「avara な行為」を 「知識を欠く (jñānavarjita) 行為」と註釈している。
- 10) MuU.1.1.2 : atharvaṇe yāṃ pravadeta brahmā atharvā tāṃ purovācāṅgīre brahmavidyām / sa bhāradvājāya satyavahāya prāha bhāradvājo ṅgirase parāvarām // 「Brahmā が Atharvan に語ったその brahmavidyā を, 以前, Atharvan は ṅgir に語った。彼 (ṅgir) は, Bhāradvāja の Satyavaha に, Bhāradvāja は ṅgiras に, para と avara を / 代々語った」。

- 11) MuU.2.2.8 : bhidyate hṛdayagranthīś chidyante sarvasaṃsayāḥ / kṣīyante cāśya karmāṇi tasmin dr̥ṣṭe parāvare // 「心臓の結び目が分けられ、全ての疑惑が断ち切られる。それが para と avara であると直感したとき、彼の諸々の行為が破壊される」。
- 12) MuU.2.1.10 : puruṣa evedaṃ viśvaṃ karma tapo brahma parāmṛtam / etad yo veda nihitaṃ guhāyāṃ so 'vidyāgranthiṃ vikiraṭiḥa somya // 「他ならぬ Puruṣa がこの全てであり、行為であり、苦行であり、Brahman であり、最高の不死である。これが心臓に置かれたと知った者、彼は、ここで無知の結び目を撒き散らす。良き者よ」。
- 13) この点に関しては、bhāṣya も同様の理解をしている。田中 (2019) 参照。
- 14) MuU.2.1.1 : tad etat satyam, yathā sudīptāt pāvakād visphulingāḥ sahasraśaḥ prabhavante sarūpāḥ / tathākṣarād vividhāḥ somya bhāvāḥ prajāyante tatra caivāpiyanti // 「そういうこれが真実である。輝く火から、同じ姿を持つ千の火花が散るように、そのように、良き者よ。不滅のものから種々の存在が生じ、そして同じ場所に帰入する (api √i)」。
- 15) MuU.2.2.2 : yad arcimad yad aṇubhyo 'ṇu ca yasmiṃl lokā nihita lokinaś ca / tad etad akṣaraṃ brahma sa prāṇas tad u vāñ manas / tad etat satyam tad amṛtaṃ tad veddhavyaṃ somya viddhi // 「輝いていて、微細なものよりも微細であり、諸世界が置かれ、人々がいるところ。そういうこれが不滅の Brahman である。それは氣息であり、それは今や、言葉であり、思考である。そういうこれが真実である。それは不死である。それが貫かれるべきである。良き者よ。知れ」。
- 16) 5. 「学者たちの入門」との関係を参照。
- 17) MuU.1.2.1 : tad etat satyam, mantreṣu karmāṇi kavayo yāny apaśyaṃs tāni tretāyāṃ bahudhā saṃtatāni / tāny ācaratha niyataṃ satyakāmā eṣa vaḥ panthāḥ sukṛtasya loke // 「そういうこれが真実である。諸々の mantra において、知者たちが見た諸々の行為、それらは3種のものにおいて、種々に広がった。真実を望む者たちは、それら(行為)を毎日行え。これは良く為された世界[を得る]ための、お前たちの道である」。
- 18) MuU.2.2.10 (= KU.5.15, ŚU.6.14) には、kuto 'yam agniḥ 「まして

- や、この[地上の]火(祭火)はなおさらである」という表現もある。 ayamなどの指示代名詞については天野(2002)参照。
- 19) MuU.1.1.1 : brahmā devānāṃ prathamāḥ saṃbabbhūva viśvasya kartā bhuvanasya goptā / sa brahmavidyāṃ sarvavidyāpratiṣṭhām atharvāya jyeṣṭhaputrāya prāha // 「神々のうちで第一のものとして、一切の行為者であり世界の保護者である Brahman が顕現した。彼は、一切の知識の拠り所である brahmavidyā を、長男である Atharvan に語った」。
- 20) 祭式を意味し得る avidyā が vidyā と共に要求される場合もある。 ĪU.9 : andhaṃ tamaḥ praviśanti ye 'vidyām upāsate / tato bhūya iva te tamo ya u vidyāyāṃ rataḥ // 「avidyā を崇める者たちは、盲目の暗闇に赴く。一方、vidyā で満足する者たち、彼らはより大きいような暗闇に[赴く]」。 ĪU.10 : anyad evāhur vidyayā 'nyad āhur avidyayā / iti śuśruma dhīrāṇāṃ ye nas tad vicacakṣire // 「vidyā とは全く別ものであると、人々は言う。 avidyā とは別ものであると、人々は言う。以上のように、我々にそれを語った賢者たちから我々は学習した/聞いた」。 ĪU.11 : vidyāṃ cāvidyāṃ ca yas tad vedobhayaṃ saha / avidyayā mṛtyuṃ tīrtvā vidyayā 'mṛtam aśnute // 「vidyā と avidyā を共に知る者、その者は avidyā によって死を超え、vidyā によって不死を獲得する」。 *Īsopaniṣad* における vidyā と avidyā については Jones (1981) 参照。
- 21) 薪の持参が見られる他の例については Kajihara (2016:281) 参照。薪の持参がなされても入門させない話 (ŚB.11.4.1.9, ChU.5.11.5) がある。
- 22) 「ウパニシャッドの入門儀礼」については梶原 (2016:46-50) 参照。
- 23) 梶原 (2016:73) 参照
- 24) 止住の要求が見られる他の例については梶原 (2016:48-50; 84) 参照。
- 25) 阪本(後藤) (2014:336), 梶原 (2016:46) 参照。
- 26) vratā の語は *Ṛgveda* で「神々/人間の掟」を指す言葉として現れ、限られた期間遵守する誓戒を意味するようにもなったとされている (Schmidt1958:13, 梶原 2005:169-170 参照)。vratā を遵守する際に髪や鬚を伸ばし続ける例もある (阪本(後藤) 1994:78 参照)。 *Muṇḍakopaniṣad* の姉妹テキストである *Praśnopaniṣad* には、

brahmacarya, 1年間の止住, そして vrata の要求が見られる. PU.1.2: tāt ha sa ṛṣir uvāca / bhūya eva tapasā brahmacaryeṇa śraddhayā samvatsaraṃ samvatsyatha / yathākāmaṃ praśnān pṛcchata / yadi vijñāsyāmaḥ sarvaṃ ha vo vakṣyāma iti // 「実に, 彼らに, その聖仙は言った. 「まさに再び, 苦行を伴って, brahmacarya を伴って, 信仰を伴って, お前たちは1年間止住するだろう. 望み通りに, 質問たちを尋ねよ. もし, 私が知っていれば, 実に, すべてをお前たちに語ろう」と. PU.1.15: tad ye ha vai tat prajāpativrataṃ caranti / te mithunam utpādayante / teṣāṃ evaiṣa brahmalokaḥ / yeṣāṃ tapo brahmacaryaṃ / yeṣu satyaṃ pratiṣṭhitam // 「実に, かの Prajāpati の vrata を実践する者たち, 彼らは1対を生み出すのだ. 彼らに真実が安立し, 苦行と brahmacarya を[行う]者たち, 他ならぬ彼らに, この Brahman の世界がある」.

- 27) あるいは, 「MuU.3.2.10 に列挙されている要素を全て備えた者」.
- 28) √ hu の反射態.
- 29) 現状, *Muṇḍakopaniṣad* における parā vidyā と aparā vidyā については, avara が行為などという「身近なもの」と訳され得ることから, 「遠近」の関係が想定される. また, そのような関係や, brahmacārīn と太陽の関係から, 天上の火(太陽)と地上の火(祭火)としての「高低」の関係も考えられる. AVŚ.11.5 (brahmacārīn 讃歌) と太陽崇拜との関係については Bloomfield (1964:626), Kajihara (1995: (4)), 梶原 (2016:80) 参照.
- 30) このような解釈は, Upaniṣad のような哲学の台頭によって Veda 祭式の価値が失われていったという見方を否定する辻の見解(辻 1990:34-35 参照)や, Tull (1989) の業説を補強するものとなり得る.